

## 第一章 主権者または国家の支出（八）

### 第三部 公共事業・公共機関の支出（五）

#### 青少年の教育機関に要する支出（二）

しかし、ギリシャ語とヘブライ語の事情は同じではなかった。教会は、無謬とされた決定により、通称ウルガタのラテン語訳聖書を靈感による原語と同列に位置づけ、原典と同等の権威を与えた。このため、聖職者に両言語の習得は必須とされず、大学の一般課程でも長らく必修とはならなかった。スペインの一部の大学では、ギリシャ語が一度も課程に採用されなかったところさえあった。宗教改革の初期、改革者は新約はギリシヤ語、旧約はヘブライ語の原文に拠るほうが自説に有利と見て、カトリック教義に沿うよう次第に調整されたとみられるウルガタ訳の誤りを多数指摘した。その結果、ローマ・カトリックの聖職者は同訳の弁護や説明を迫られたが、原典の素養がなければそれは難しかった。これが契機となり、原語の学習は宗教改革を受け入れた大学でも、退けた大学でも広く進んだ。ギリシャ語は古典学の諸分野と密接に結びつき、当初はカトリ

ック圏やイタリアの学者・人文主義者が主に担ったが、宗教改革の興隆とともに普及が広がり、多くの大学でラテン語の一定の習熟を経て哲学に先立って教えられるようになった。これに対し、ヘブライ語は古典学との結びつきが弱く、聖書以外に定評ある文献も乏しかったため、通常は哲学を終えて神学に進む段階で学び始められた。

ギリシャ語とラテン語の初歩は本来、大学で教えられてきた。いまでもその方針を続ける大学がある一方、入学前に両言語のうち少なくとも一方、あるいは双方の初歩を身につけてくることを学生に求める大学もある。総じて、これらの学習は大学教育において依然として大きな比重を占める重要な分野である。

古代ギリシアの哲学は、根本的に自然学（自然哲学）・倫理学（道徳哲学）・論理学の三部門から成る。この一般的で包括的な区分は、事物の本性にかなった妥当な整理とみなされている。

自然界の大きな現象、たとえば天体の運行、日食や月食、彗星、雷鳴と稲光、異常な天象や気象、さらに動植物の生成から成長、消滅に至る過程は、人々に驚きをもたらすし、その原因を知ろうとする好奇心をかき立ててきた。まず迷信がこの好奇心に応じ、出来事を神々の直接の働きや介入に結びつけて説明した。やがて哲学が現れ、神の働き

に頼らず、人間にとって身近で、よく知られ、確かだと考えられる原因に基づいて説明を試みた。これらの大現象が関心と好奇の出発点である以上、それを解き明かす学問が、哲学のうちで最初に培われ開かれた部門となるのは当然である。ゆえに、史料に名をとどめる最初期の哲学者は、概して自然哲学の担い手として記録されている。

あらゆる時代と地域で、人びとは互いの人となりや意図、行いに気を配り、人生の指針となる規則や格言を合意のもとに築いてきた。文字が広まると、賢人や自ら賢いとする者が、すでに尊重されていた格言を補い、何が適切で何が不適切かについて自分の見解を示した。表現の形式には、イソップに連なる技巧的な寓話のほか、ソロモンの箴言、テオグニスやフォキュリデスの詩、ヘシオドスの一部に見られる簡潔で平明な箴言が用いられた。しばらくは、分別や道徳に関する格言を増やすことに終始し、それらを明快で体系的な秩序に並べることも、自然の因果にならって一、二の一般原理で相互に結びつけて説明することもなかった。多様な観察を少数の共通原理で関連づけ、体系的に配列するという発想は、古代の自然哲学の萌芽的な試みの中で初めて意識され、その後この方法は道徳にも及んだ。日常の格言は一定の順序と方法で整理され、少数の共通原理で連結された。自然現象の配列と連関をめざした手法にならったのである。こうした結

合原理を探り、解明して説明しようとする営みが、厳密な意味での道徳哲学である。

自然学や道徳哲学では、著者ごとに異なる体系が示されてきたものの、それを支える論証は厳密な証明にはほど遠く、多くは高々蓋然的なものにとどまり、ときには日常語の不正確さや曖昧さに寄りかかった露骨な詭弁にすぎなかった。思弁的な体系は古今を通じて、常識ある人ならささやかな金銭の判断にさえ用いないほど軽い理由で採用されてきた。露骨な詭弁が世論を左右することは、哲学や思索の領域を除けばほとんどないが、この領域ではしばしば大きな影響を及ぼしてきた。各体系の支持者は、対立する体系の論拠の弱点を暴こうと努め、その検討と吟味の過程で、人びとは蓋然的議論と証明的議論、誤謬に導く議論と決定的議論の違いを考えざるを得なかった。こうした観察と精査の積み重ねから、良い推論と悪い推論の一般原理を扱う学として、論理学が必然的に成立した。論理学の成立は自然学や道徳哲学より遅いが、古代の多くの学派では、重要な主題に入る前に推論の良否を見分けられるようにすべきだとして、論理学が両学に先立って教えられた。

欧州の多くの大学では、従来の哲学の三分法が改められ、五分法が採られている。

古代の哲学では、人間の精神と神の本性に関する教理や学説は自然学の範疇に含めら

れ、これらは本質の捉え方にかかわらず宇宙体系の構成要素であり、最も大きな影響力をもつ部分と見なされた。そこから理性が導く結論や推測は、宇宙の起源・運行・変化を論じる学の中で、重要な二章を占めていた。ところが欧州の大学では、哲学は神学に従属し奉仕する学として教えられたため、この二章に、他の章以上の時間が割かれた。

やがて章は拡張されて細分化され、ほとんど確かめようのない霊に関する学説が、比較的理解しやすい物体に関する学説と、体系の中で同等の比重を占めるようになった。こうして両者は独立の学問として扱われ、いわゆる形而上学（霊学）が自然学と対置され、より高尚で崇高であり、かつ特定の職業や職能にはいっそう有用だとして奨励された。

一方で、実験と観察を本分とし、注意深い探究が多くのある発見をもたらす領域はほとんど顧みられず、その代わりに、二、三の単純で自明な真理を除けば曖昧さと不確かさばかりが残り、詭弁や枝葉、こじつけを生みやすい主題がもてはやされた。

二つの学問を互いに対置すると、その比較から自然に第三の学問が生じた。これが存在論（オントロジー）で、両者に共通する性質や属性を扱う。ただし、当時の学界、ことにスコラ派の形而上学や靈魂論の多くが技巧的な議論や詭弁に依存していたのだとすれば、蜘蛛の巣のように脆弱なこの存在論も、結局はそうした議論に支えられていた

にすぎないことになる。存在論はしばしば形而上学とも呼ばれた。

古代の道徳哲学は、人間の幸福と完成を、個人にとどまらず、家族や国家、人類社会の一員という立場からも明らかにしようとし、その体系では人生の義務は幸福と完成に奉仕し、その下位に置かれるものとされた。やがて、道徳哲学も自然哲学も神学の下位分野として教えられるようになる、義務は主として来世の幸福に奉仕する手段として語られた。古代では、徳の完成は、それを備える者にこの世で最も完全な幸福を必然的にもたらすとされたのに対し、近世以降の多くの議論では、それは一般に、むしろほとんど常にこの世の幸福と両立しないとされ、天国は悔い改めと苦行、修道者の厳格な禁欲と自己卑下によってのみ得られ、自由で寛大で気骨ある行いでは得られないと説かれた。その結果、学問としての道徳哲学の主流は事例主義と禁欲的道徳へと傾き、哲学において重要な領域こそが最も深くゆがめられた。

欧州の多くの大学では、哲学教育の標準課程の履修順はおおむね定まっており、一般的なカリキュラムもそれに準じている。順序は概ね共通で、第一に論理学、第二に存在論、第三に人間の魂と神の本性を扱う靈魂学、第四に靈魂学と直結し、魂の不死や神の正義にもとづく来世の賞罰と結びつけられた形骸化した道徳哲学が続き、締めくくりは

簡略で表面的な自然学である。

欧州の大学は、聖職者養成を念頭に、従来の哲学課程を神学への導入としてふさわしい形に組み直した。しかし、そこに付け加えられた過度の精緻さ、行き過ぎた抽象や詭弁、事例主義の道徳論（カズイステイクス）、禁欲的道德は、紳士や実務家の教育にはそぐわず、理解を深めたり人間性を磨く助けにもならなかった。

この種の哲学課程は、いまま欧州の多くの大学で行われており、教員に求められる努力の程度は各大学の制度に依じて変わる。とりわけ資金や資産が潤沢な大学では、担当教員が形骸化した課程の一部だけを取り上げて済ませがちで、授業も総じて杜撰で表層的である。近代以降、哲学の諸分野では改良や進展が重ねられてきたが、その多くは大学の外で生まれ、大学発の成果はごく限られる。それにもかかわらず、多くの大学は導入に消極的で、各地で退けられた旧説や時代遅れの偏見の避難所であり続ける道を選ぶところも少なくない。一般に、資金が潤沢な大学ほど導入は遅く、既定の教育計画や体系に大きな修正を加えることを強く嫌う。対照的に、比較的貧しい大学では採用が進みやすく、教員は生活が評判に左右されるため、世の通念に敏感にならざるを得ない。

欧州の学校や大学は当初、聖職者の養成を目的に設けられたが、その職に必要な学問

の教育でさえ十分とはいいがたかった。それでも時代が下るにつれ、これらの機関は、教育を望むほぼすべての層、とりわけ上流階級や富裕層の子弟が通う場となった。幼少期から生涯の職に本格的に就く年ごろに至るまでの長いあいだ、その時間を少しでも有益あるいは有利に過ごす手だてとして、これに勝る仕組みが他に見当たらなかったからである。ただし、学校や大学で教えられる多くの内容は、実務や職業への備えとして最適とはいい難かった。

英国では、学校卒業後に若者をすぐ大学に進ませず、海外に送り出す傾向が強まっている。旅は成長に資すると言われるが、十七、十八歳で出て二十一歳で戻るなら、三、四年分の齢を重ねるだけで、その年頃なら成長は自然に起こる。滞在中に一、二の外国語に触れて多少の知識は得ても、不自由なく話し書きできる水準に達する者は多くない。むしろ虚栄が募り、節度を欠き、享楽に流れやすくなり、学業や実務への集中は在宅時より弱まりがちだ。保護者の目や監督から遠い土地で、もっとも大切な時期を軽はずみな遊興に費やせば、初期教育で身につけた有益な習慣は固まらず、その跡も薄れる。こうした早期の海外旅行がもてはやされるのは、大学が自らの信用を損なっているからだろう。息子を海外に出しておけば、父親は当座、家で無為に過ごして身を持ち崩す姿を



見ずに済む。

以上は、近代の教育制度の一部がもたらした影響であり、その帰結でもある。

教育のあり方を定める計画や制度は、国や時代によつて方針や設計が異なり、さまざまな形で整えられてきたと考えられる。

古代ギリシャの諸都市国家では、公職者の監督のもと、すべての自由市民が体操と音楽の教育を受けた。体操は、身体を鍛え、勇気と胆力を養い、戦の労苦や危険に耐える力を培うことを目的としており、ギリシャの民兵が世界有数の精強さで知られた事実はこの公教育が概ねその目的を果たしていたことを物語る。音楽については、当時の制度を記した哲学者や歴史家によれば、心を洗練し、気性を和らげ、公私にわたる社会的・道德的義務を果たす姿勢を育てることが狙いとされた。

古代ローマのマルス野での鍛錬は、ギリシャのギムナシオンに相当し、その効果もおおむね同様であった。ただし、ローマにはギリシャ型の音楽教育はない。それでも、私徳と公德の両面でローマはギリシャに匹敵し、総じて優越したとみるのが妥当である。私生活の面での優位は、両文明に通じたポリュビオスとハリカルナッソスのディオニュシオスが明言し、公的道德の優位は歴史の通説が裏づける。自由社会の公的道德の核は、

対立派閥の穩健さと自制にある。ギリシャでは派閥抗争がしばしば苛烈化して流血に至ったのに対し、ローマではグラックス兄弟の時代まで派閥抗争による流血は一度もなく、その後には共和政は事実上の解体へ向かった。ゆえに、プラトン、アリストテレス、ポリュビオスの見解や、それを擁護するモンテスキューの論拠を踏まえても、ギリシャの音楽教育が徳の涵養に大きく資したと断ずるのは難しい。むしろ、古代の教養人が先例を敬う心性から、起源が古く長く続いた慣習に政治的英知を読み込んだ可能性が高い。音楽と舞踏は古来、未開とされた多くの民族で主要な娯楽であり、社交にふさわしい素養と見なされてきた。今日の西アフリカ沿岸、古代ケルト、古代スカンディナヴィア、さらにはホメロスが伝えるトロイア戦争以前の古代ギリシャにもその例が見られる。のちにギリシャの諸部族が小規模な共和政の共同体にまると、こうした素養が長期にわたる公的な共同教育の一部として残ったのは自然な成り行きである。

ローマでも、また法と慣習の記録が最も整っていたギリシャの都市国家アテネでも、若者に音楽や軍事の鍛錬を教える指導者を国家が任命し、報酬を支給した例はない。国家はすべての自由市民に、戦時の国防に備えて軍事演習の習得を義務づけたが、どの教師に学ぶかは各自の裁量に委ねられていた。国家が整備したのは、稽古や演習のための

11 第一章 主権者または国家の支出（八）

公共の練習場、すなわち野外の練兵場だけであった。